

観 土 日

平成元年 8 月

第 11 号

年 2 回 発行

編集 発行

小 出 真 行



正 観 寺 秋 季 大 祭



悪心は迷いのもと

善心はさとりに至る道である

万灯会願文

としとれば (四)

聞きたがる

死にともながる

さびしがる

心はまがる

欲ふかくなる

仙崖・老人六歌仙



私たち人間という動物は、とかく年をとるにつれて、人の話が気になりがちですぐ聞き耳をたてたりしますし、当然死にたくもなですし、ふと心を落ち着かせて物思いにふけっていると、自分という存在が虚しく感じることもありましょう。そして、人の真意がくみとれず、欲が深くなるのも全て物事に対しての執着が深くなったということなのです。あまり物事に執われずゆったりとした心を持ち続けたいものです。

蓮系の寺院に多いようです。それは、宗旨が「法華経」を唯一の經典とするからです。俗に「観音経」といって「般若心経」と同様に、よく一般に誦まれているお経があります。このお経は本来、独立した經典はなく「法華経」の一部（第二十五章目の普門品）なのです。

では、その内容に少しふれてみますと「観世音菩薩はどんな因縁からその御名を得られたか」という無尽意菩薩（仏の説法を聞く聴衆の代表）の問いに、お釈迦さまは、「無量百千億（たくさん）の衆生があつて、諸々の苦悩を受けるとき、観音の名を一心にとなえれば、観世音菩薩は直ちにそのこえを観じて救うてくださる」と答え、私達の外から襲ってくる災難、内にある三毒も避けることが出来る」と説かれているのです。そして「三十三身十九説法」つまり観世音菩薩は相手に応じて無数に化身し、時間と空間を超越して説法することを示しており、私たち衆生のあらゆる畏怖を和らげ、とり除いてくれるとあります。最後の「世尊偈」といわれる韻文は各行五言一句からなる詩によって教えが再度、格調高く心に刻み込むようにしてあります。

「観音の諸々の苦悩を抜く自在の業と普門示視の神通力の教えを聞いた者は必ず功德を得るであろう」とのお釈迦さまの問いに対し

て、観世音菩薩の絶対の慈悲と衆生の諸願満足に心をうたれつつ。

「これを聞いた八万四千の衆生は仏と同じ無上の菩提心を起こす」と

と応答したのです。

つまり「観音経」は誰にでもわかる表現を用いて、観世音菩薩が現世的な苦しみや災難をとり除き幸福をもたらしてくれることを約束しながら、いつの間にか仏教の深いきとりの境地に導いてくれる、さわめて明快な力強いお経であります。

話はおとにかえりますが、観世音菩薩も地藏菩薩同様、わが国において熱っぽく歓迎された菩薩さまです。とりわけ仏像彫刻の世界におかれましても、エース的な存在です。この「観音信仰」も伝統的に定着しておりまして、例えば五月に巡拝いたしました、西国三十三観音霊場、その他秩父三十四観音霊場等たくさんあります。観世音菩薩は字義の通り世の音を観ずるお方で、この世の音とは、わたくし達が救いを求める声にはかありません。また、「観自在天」ともいわれますように、慈悲の眼をもって苦しみという苦しみをくまなく観とどけ、超越的な力でもって救わずにはおかないという誓いがあるのです。つまり、いずれの世界をも見抜き見通し、

その声を聞きとどけ、ただちに救いの手を差し向けるというのです。そうした一切の苦しみの救済主としてのお働きに加えて、あの女性的な、いかにも母性のやさしさを思わせるお姿が「水子」に対して、何より救済を思わせられるのでしょね。

い い 湯



「地獄極楽裏表」といったことわざがありますが、この意味は、地獄と極楽とは全く反対で遠くかけ離れているように思われがちですが、それは一枚の硬貨の裏表のようなものなのですよ、と言っているのです。例えば、こういう話があります。

あの世には、地獄湯と極楽湯が隣どうしに並んで丁度銭湯の男湯と女湯のように、大きさも設備も何から何まで同じで、おまけに中に入っている人数も同じとしましょう。

地獄湯の方をのぞくと喧嘩きわめていました。それというのも、あちらこちらで殴りあいの喧嘩がおこり、やれ足を踏まれたとか、湯がかかったとか、肘で突かれたとか……。そんな争いが絶えなくまさに地獄の光景です。ところが、もう一つの極楽湯の方はどう

かというところ、こちらは静かそのものでまさに極楽気分なのです。不思議な事に地極湯と同じ大ききで同じ人数の人がいるのに和気あいあいと入浴を楽しんでいるのです。

何故かわかりますか。

それというのも極楽湯では皆さんが互いの背中をまあるく輪になって洗っているのです。ですからお互いの肘がぶつかりあうこともなく、狭い所でも仲良くやっていけるのです。つまり、極楽も地獄もお互いの心の持ちようだとということなのです。

お互いの背中を洗うということは、もしかしたら自分の心を洗うということなのかも知れませんね。

お互いに



私たちの身体にしても、衣類にしても、もし洗うことをしなければ汗と埃で垢まみれで汚れがしみ込んできれいにすることは出来なくなるでしょう。ですから、そうならないために、入浴しては身体を洗い、衣類も特に肌着などは毎日取り替えて洗濯するはずですから、部屋や庭も同じ事で、常に小まめに掃除すればいつでもきれいで気持ちよく暮らせます。目

には直に見えないだけになかなか気がつきませんが、この掃除や洗濯をおろそかにして見ますと、汚れやしみや埃がたまって見るのも嫌になってきます。そういえば、私が高野山に居た時に、奈良県の天理市（天理教の本部）に行った時、老若男女と問わず町の人達が一懸命に道路をきれいに掃除されており、びっくりしたことがあります。特に便所は隅々までよく掃除が行き届き驚くことしきりです。（やはりこの様にきれいに町全体が掃除してありますと、お参りに来られた方もさぞかし気持ちのいいことだろうと思います。私も今の自坊を少しづつきれいにしていけないといけないと深く反省させられます。）玄関と便所がきれいに掃除されている家は、何かと心配りがあるはずですが、皆さんの家はどうか。

さて、それでは心の汚れについて少し考えてみましょう。私たち人間の心の中には、どんな人でも「貪・瞋・痴」の三毒があります。「貪」とは、貪りの心で、つまり様々な欲望のことですから、お金持ちになりたいとか、立派な家が欲しいとか、いい車が欲しいとか、出世したいとか、おいしい物を食べたいとか、それに性欲、睡眠欲などがこの「貪」なのです。

「瞋」とは、つまらないことにすぐ腹を立てて、いつもイライラ、ギスギスした心の有り方です。

「痴」とは、愚痴のことで、物事の是非や善悪がわからず、正しい判断の出来ない愚かさをいいます。

この三毒を煩惱ともいいます。これが、心の汚れであり、しみなのです。こうした煩惱を正しくコントロールしていけば、文明の利器の発明となり、私たちの生活のレベルを上してもくれますが、誤ると、傷害沙汰や殺人事件にもおよぶ大それた犯罪に直接結びつくことが今古東西たくさんあります。

しかし、人間である以上、煩惱のない者は誰一人もありませんし、お互いに「感情」と「勘定」の動物ですから、大小様々な誤りを過さずには生きて行けません。反面、人間であればこそ、誰もが良識や良心を必ず心の奥に秘めているのです。これが「仏心」なのです。この「仏心」によって、よこしまな心と思いつどまらせ、はやまった行動を阻止しますので、「自制心」とも言えるのでしょう。相手の気持、相手の立場に立って物事を判断出来る「心」を養いたいものです。その心が「まわりまわって」幸福をもたらすものだと信じて止みません。